シンデレラの葬送

小林久三

レラの葬送

小林久三

シンデレラの葬送　定価　九八〇円

第1刷発行　昭和56年10月25日

著　者　小林久三
発行者　三木　章
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽2－12－21
電話　東京(03)945－1111(大代表)
振替　東京8－3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えします。
© KYUZO KOBAYASHI 1981 Printed in Japan

0093-307624-2253（0）　（文2）

目次

第一章　不吉な朝　5
第二章　鎖の装飾　32
第三章　揺れる部屋　53
第四章　黒い傾斜　73
第五章　死体のある迷路　100
第六章　消えた二億五千万円　126
第七章　白い旅　151
第八章　引き裂かれた夜　177
第九章　私は殺される…　203
第十章　シンデレラの埋葬　229

装幀　野中　昇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

シンデレラの葬送

第一章　不吉な朝

1

チャイムが鳴ったのは、朝の九時ちょっと過ぎのことだった。

そのとき、中井冴子は、母の津恵とリビング・ルームでテレビをみていた。ブラウン管には、人気女優の晴れやかな顔が映っている。カメラは、やがて女優の白い指を大写しで、とらえた。指には、琥珀色したトパーズの指輪がはめられている。

ライトをあびて、トパーズの指輪は眩く光った。

「このたびのご婚約、おめでとうございます」

と、司会者が女優に声をかけた。

「ありがとうございます」

女優は満面に笑みをたたえて、軽く頭を下げた。双眸は、キラキラと輝いている。トパーズの輝きよりも、はるかに美しいように、冴子にはおもえた。

「ご結婚は、いつ頃になりますか」

「来年の三月くらいを予定しています。それまでは、仕事のスケジュールがぎっしりつまってますので」

「新婚旅行は？」

「さあ、そこまではまだ……」

女優は指で額にかかる髪の毛をかきあげながら、照れたように答えた。唇には、相変わらず、微笑が溜まっている。白いしなやかな指の動きといい、微笑といい、いかにも女優らしく洗練されていて、美しさがブラウン管からふきこぼれてきそうにみえた。

冴子は、画面の女優をみつめた。

朝のワイドショー番組だが、どこかの会社の若社長と婚約したらしいその女優をみつめながら、冴子は、いまの自分の顔もまた、テレビのなかの女優に負けないくらい、幸せの予感に光り輝いているはずだわ、とおもった。外見的な美しさでは、多少、劣ることがあったにしても。

〈あの女優とはちがって、明日、結婚式をあげるのよ〉

と、冴子は胸のなかで、小さく呟いた。新婚旅行も、ローマ、パリ、ロンドンなど、ヨーロッパにいくことになっている。二週間、ヨーロッパ一周の旅。

新居も、六本木のマンションに決まっている。三ＤＫ。つい最近、竣工したばかりのマンションで設備は申し分ない。

明日から五堂利夫とはじまる新婚生活のことにおもいをはせたとき、冴子は胸がきゅんと締めつけられるような気がした。その感覚は、ひどく甘美なところがあった。

テレビからは、ワイドショーの司会者と、女優のやりとりがつづいている。

「将来、どんなご家庭を……」

「一生、友だちみたいな夫婦でいられたら……と、おもいます」
「お子さんは、何人くらい？」
そんなやりとりを縫って、チャイムがきこえてきたのだった。
最初に気づいたのは、母の津恵のほうだった。
「お客さんかしら？」
津恵が、冴子にいった。
「お客さん？」
冴子は立ちあがって、テレビの音量をさげた。テレビの音で、チャイムがききとりにくかったのだ。
音量をさげると同時に、チャイムの音がはっきり響いた。
「こんな時間にだれだろう？」
近くのクリーニング屋か酒屋のご用ききかと、冴子はおもった。
「わたしが出るわ」
「いいのよ、あんたは」
と、津恵が押しとどめた。「明日から、あんたはお客さまになるひとなんだから」
「いうわね」
冴子は苦笑した。
津恵が玄関のほうに姿を消した。
ちらと見送って、冴子は、再びブラウン管に視線をもどした。
画面には、依然として、女優の顔が映し出されている。さっきと異なり、音が低くなっている。声がよくききとれない。冴子にとって、そのほうが好都合だった。
ソファに腰を降ろして、テレビに目をやりながら、冴子は頭の奥でべつなものをみていた。自分の結婚相手となる五堂利夫の精悍な顔だった。
「五堂利夫さん」
と、そっと口に出して呟き、つづけて
「五堂冴子」
そう独り言をいって、冴子は顔を赤らめた。明日から、五堂と姓が変わるのだけれども、結婚相手としては申し分のない男性だとおもう。一流の国立大学を出ている。東亜鋼管本社製品企画室につとめている。三十歳になったばかりだが、すでに係長に昇進したという。
エリート・コースを着々と歩んでいるわけで、将来は課長、部長に昇進していくことは間違いないといわれている。性格的に真面目だが、かといって堅苦しいところはない。ユーモアのセンスに富み、幅広い知識をもっているため、会っていて退屈することはない。
身長も一メートル七十五センチある。お洒落の感覚も悪くはない。父の修平や母の津恵が、口癖のように、
「お前には過ぎた相手だ。シンデレラになったようなものだ」

というが、シンデレラというのは誇張だとしても、男性運にめぐまれたといわざるを得ない。
そう考えながら、冴子は飲み残しのコーヒーを口許に運んだ。さめた苦いコーヒーを舌のうえで味わいながら、また五堂利夫の顔を、頭のなかにおもい描いた。
津恵が室内にもどってきたのは、そのときだった。
「冴子、あなたにお客さんよ」
その声は、心なしか曇っているようだった。
「わたしに？」
「三十分ほど、あなたに会いたいんですって」
「だれ、お客さんって」
「世田谷署の刑事さんだそうよ」

2

玄関先に、二人の男が立っていた。
ひとりは、小柄な初老の男だった。もうひとりは、長身の痩せた若い男だった。若いといっても、三十代半ばくらいだろう。
玄関に出てきた冴子の姿をみるなりに、初老の男が、上着の内ポケットから黒い手帳をちらとみせて、
「世田谷署捜査課の野上といいますが」
と、こもった声でいい、
「中井冴子さんですね」
「はい」
「ちょっとおききしたいことがあるのですが」
「わたしにですか」
「手間はとらせません」
「なんでしょうか」
冴子は怪訝そうに問い返して、目の前の二人の刑事の顔を交互にみた。二人の目は、異常に鋭い。顔に緊張の色が浮かんでいるのが、ありありとみえる。一瞥のうちに二人に観察されていることを悟って、彼女は背筋に悪寒に似たものを覚えた。どんな用件で、世田谷署の刑事がたずねてきたのだろうか。
野上刑事は、ちらとすくうように冴子の目をみると、声をひそめて、
「二週間ほど前に、那須のほうへドライブしてませんか」
「はい」
と、答えて、冴子は頭の隅が、しんと冷たくなっていくのを感じた。刑事は、あの事を知って、確かめにきたのだろうか。
「那須へドライブしたのは、十月十一日から十三日の間……そうでしたね」
「ええ」
「ドライブしたコースは？」
衝撃感で、冴子は息をつめた。失語症にかかったようで、にわかに言葉が出てこない。
「東北自動車道を通って、那須高原に入り、それから塩原

に向かい、霧降高原に出て、そこで車内に一泊しましたね」
「……」
答えない冴子をみて、野上の頬に軽い苦笑が浮かんだ。
冴子はその声の背後に、不気味なものを感じた。頭のなかに、蒼白い光がスパークし、交錯する光の裂け目から、ひとりの男の顔がのぞいたような気がした。
「北垣浩司というひとを、知ってますか」
長身の刑事が、言葉をはさんだ。
「キタガキさん……」
呻くようにいって、冴子は身を固くした。北垣浩司が、あの晩の出来事を刑事にしゃべったのだろうか。
北垣がなぜ？
なんのために？
そんな疑問が、胸のなかで弾ぜた。
「ご存知ですね、北垣さんを？」
長身の刑事が、念を押した。
冴子は、一瞬、返事に迷った。
「素直に答えていただけませんか」
「北垣さんが……」
やっと、声が出た。「どうかしたのでしょうか」
「十月十二日の夜、あなたは北垣浩司と車のなかで一晩過ごしませんでしたか」
「……」
「北垣浩司は、そういっているのですがね」
「……いいえ」
冴子は、とっさに嘘をついた。
意識的に嘘をついたわけではない。明日、五堂利夫との結婚を控えているという意識が、そういわせたのだった。
「ほんとうですか」
野上刑事がたずねた。
「はい……」
「しかし……」
といいかけて、野上は口をつぐんだ。この初老の刑事は、冴子の肩越しになにかをみて、あわてて言葉を喉もとで噛み殺したようだった。
冴子は、背後をふり返って、唇を噛んだ。視野の隅に、ちらと動く人影があった。
〈ママだ！〉
と、冴子は直感した。母の津恵は、捜査課の刑事がたずねてきたことを不審におもい、様子をうかがおうとしているのだろう。
〈那須のドライブでの出来事は、だれにも話してはいない〉
両親に余計な心配をかけたくなかったからだが、いま、北垣浩司とのことを母にきかれたくないと、冴子はおもった。
二人の刑事は、そんな冴子の気持ちを見透かしたかのよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うに、顔を見合わせると、ややあって野上が、
「ちょっと外へ出られませんか」
と、押し殺した声でささやいた。
出られます、と冴子は答えた。
刑事たちは、玄関の外に出た。
一言、津恵に断っておこうとおもって、冴子は奥のリビング・ルームに、
「ママ、ちょっと出かけてくるわ、すぐにもどるわね」
と、声をかけた。つとめて明るくいおうとしたが、途中で声がかすれた。
即座に、津恵が顔を出した。
こちらをみた津恵の顔は、ひどく心配そうだった。目が、もの問いたげに光っている。
その目をふり切るようにして、冴子はサンダルを突っかけて、玄関先に出た。
玄関に出ると、楡の木が大きな影を投げて、ポーチに黒い地図をつくっていた。それは、目にみえない不吉な影が、この家に落ちているようにみえた。得体の知れぬ不安に、彼女の胸は微妙に鳴った。
門を出た。
「駅前の喫茶店にでもいきましょうか」
と、野上刑事がいった。
否応もなかった。

うなずいて、冴子は二人の刑事と一緒に経堂の駅に向かった。
路地を折れると、駅前のアーケードの商店街に出る。アーケードを抜けたところに、駅があった。小田急線の経堂駅である。新宿から準急で十五分足らずのところにあり、都心に出るには便利な場所である。
三人は黙々として歩いた。
駅前のビルの地下にある喫茶店に入った。五堂が、冴子の家をたずねてきた帰りに、二人でよく入る店である。
「シレーヌ」といった。
店の隅に席を取った。
二人の刑事と、対い合うような形になった。
席についたところで、長身の三十代の刑事が、改めて自己紹介をした。警視庁捜査一課の滝と名乗った。警視庁の刑事と、所轄署の刑事が行動をともにしているのだろう。
ウエートレスが、注文を取りにきた。二人の刑事はコーヒーを注文した。冴子は、レモンスカッシュを頼んだ。
ウエートレスが去るのを見計らって、野上が、
「明日、結婚式だそうですね。おめでたいところに、無粋な男が押しかけて申し訳ありませんな」
と、いった。滝刑事が、言葉を引き取った。
「もう一度、おたずねしますが、ほんとうに北垣浩司という男を知りませんか」

「はい」
冴子は目を伏せて答えた。「そのひとが、なにかしたんですか」
「北垣浩司は、殺人容疑で逮捕されたのです。十月十二日の夜、女を殺した疑いで――」

3

「十月十二日の夜に、下北沢の小学校の校庭で若い女性の死体が発見されるという事件が起こりましてね」
と、野上刑事がいった。「その女性は絞殺された後、車で運ばれて捨てられた疑いがありましてね」
「殺人事件ですか」
冴子はきき返した。喉がつまり、歯の間から言葉を押し出すようなしゃべり方になった。
「殺人及び死体遺棄ですね」
滝刑事が、そう補足した。
うなずいて、冴子は刑事の次の言葉を待った。
「被害者は、島中雅江という二十三歳のOLでした。赤坂にある貿易会社につとめる女性ですが、名古屋の短大を出ると、ひとりで上京して下北沢のアパートに住み、いまの会社につとめていたようです」
〈下北沢のアパート……〉
野上刑事の言葉を、頭のなかで反芻しながら、冴子は、下北沢といえば、経堂からすぐ近くだわとおもった。小田急線の各駅停車の新宿行きで、経堂からは四つ目、時間にして七、八分くらいしかかからない。準急なら次の停車駅にあたる。時間は五分くらいに短縮される。
〈それにしても――〉
と、冴子は訝った。被害者の島中雅江と、わたしはどんな関係があるのだろうか。島中雅江という女性を、わたしはまるで知らないのだ。「島中雅江には、恋人といえるのかどうか……親しくしている男性がいましてね」
と、野上が穏やかな声でいった。
「親しくしている男性？」
「彼女のアパートにもよく現れていたそうです」
「その方が、北垣さん？」
「ええ。ところが、最近、二人の間はうまくいっていなかったんですね。事情をきいてみると、島中雅江のほうが北垣を遠去けはじめたらしい」
「遠去けた？」
「そのことで、二人の間は険悪になった」
ゆっくりうなずくと、野上はコーヒーを口許に運んだ。
「それで？」
冴子はせきこんだ調子でたずねた。
「島中雅江のほうは、北垣には理由を説明しなかったそうです。ただ、自分には、もう近づかないでほしい、とだ

け……」

冴子の脳裡を、霧降高原で会った北垣浩司の暗い翳を含んだ顔がかすめ過ぎた。

「問題は、島中雅江が殺された十月十二日夜の北垣のアリバイですがね」

と、滝刑事がコーヒー・カップを唇にあてながらいった。

「その晩、北垣は霧降高原で、あなたと一緒にいたといっているんです」

「わたしと？」

「そうです」

「事実ですか、それは」

滝が、冴子の目を見据えるようにしていった。

「さあ——」

冴子が言葉を濁すと、相手はすかさず引き取った。

「北垣がいうには、島中雅江の態度の変化にショックを受けて、十月十日に会社をやすんで、ふらっと旅に出た。昔、雅江と一緒にいったことのある南会津に入り、山王峠から五十里湖を抜けて、十二日の夜に大日向山から霧降高原近くに出た。霧降高原で道に迷ったところを、あなたの車に助けられた。あなたの車のなかで、一夜を明かしたと……こういっているのですがね」

「北垣さん……北垣さんというひとが、そういっているのですか」

冴子は困惑しきった表情で、ぎごちなくきき返した。

「正直に答えてもらえませんか」

と、横合いから野上が口ぞえした。「あなたの証言に、ひとりの殺人事件の容疑者の運命がかかっているのですから」

冴子は言葉を失って、唇を噛んだ。

〈十月十二日の夜——〉

声に出さずに、そっと呟いた。

その呟きから、頭の奥の記憶板に、二週間前の情景が、するすると音もなく映し出されはじめた。

濃い霧が、あたりを閉ざしていた。わずか一メートル先が、白く厚い紗でぼかされていた。

霧降高原。

霧という言葉がかもし出す、ロマンチックな語感に誘われて、那須から車を運転して霧降高原に入った。

べつに深い目的があってドライブに出たわけではない。結婚を二週間後にひかえ、いよいよ独身生活ともお別れだという感傷から、ふらっと三日間のドライブに出かけたのだ。

もともと旅が好きだった。新宿の小さな商事会社につとめていた頃から、機会があるたびに、旅に出かけたものだった。アメリカの西海岸、ヨーロッパ一周の旅など、独身貴族といわれる若いOLなみに、海外旅行もし、国内もあらかたまわったとおもう。海外旅行の場合はともかくとし

て、国内は自分で車を運転して、ひとりでドライブに出かけるのを好んだ。長くて十日間、短い場合には日帰りのドライブが多かったけれど……

独身最後のドライブ旅行に、那須方面を選んだのだが、この旅行には、母の津恵は強硬に反対したものだった。

「万一、事故でも起こったらどうするの？」

というのである。そればかりでなく、結婚二週間前というのは、なにかと忙しい。なにもそんな時期にドライブに出かけなくても、結婚後、いくらでも二人で旅行に出かける機会はあるではないかと、津恵は最後の最後まで反対の態度を崩そうとしなかったけれども、冴子は強引に反対を押しきって那須方面三日間のドライブ旅行に出発したのだった。愛車は、東亜のブルー・スカイの中古車。

最初の夜は、那須ボルケーノラインを通り、茶臼岳近くのホテルに泊まった。

次の十二日の朝、牧場や竜化の滝などを見物した後、霧降高原に向かった。途中、車が故障して、修理に手間取り、霧降高原に入ったときは、夜の九時近くになっていた。霧降高原から日光へ抜け、日光のホテルに泊まるつもりだったのだが、霧が深くなり走行は危険な状態になった。距離感も遠近感もまったく失われ、白い闇のなかを走っているような錯覚に襲われはじめたのである。

4

冴子の頭の記憶板（スクリーン）には、まだ十二日夜の光景が映っている。

霧が薄れるのを待って、車をとめた。

車内でドライブガイドを見直し、道に迷ったことを知った。霧降高原に立ち寄り、会津西街道を抜け、日光街道に入る予定でいたのだが、どこでどう道を間違えたのか、間道に入ってしまったらしい。

夜の九時を過ぎた時間で、車の影は一台もみあたらない。山合いに近いらしく、人家の灯りもみえない。視界は濃い霧に閉ざされ、白い茫漠とした空間がひろがるばかりだ。

〈霧はすぐ晴れる〉

不安や恐怖感はなかった。万一の場合は、このまま車のなかに泊まってもいい。やみくもに霧のなかを走り、事故にあうよりも、じっと車をとめて動かないほうが、賢明だといえる。

車を、道の端に寄せた。

扉が施錠（ロック）されているのを確認すると、運転席を後ろに倒し、カー・ラジオをつけて、目をつむった。カー・ラジオから、ムード・ミュージックが流れはじめた。

ひたすら五堂利夫のことを考えた。

〈二週間後、わたしは五堂に抱かれる……〉

やがて五堂の子どもを生むだろうと、冴子は考えた。子どもは、二人でいい。できたら男女ひとりずつであって欲しい。夫と二人の子どもでつくりあげていく家庭。それは、なごやかさにみち、明るさとユーモアにあふれた家庭でありたい。

子どもが二人生まれたら、マンションは手狭になるだろう。そのときは、郊外に土地つきの一戸建ての家をつくろう。家をつくるときには、五堂と二人で、家の間取りや外観について、ゆっくり時間をかけて設計プランを練ろう。

それまでは、マンションに住む。すでに家財道具の配置や、カーテンから壁紙の色にいたるまで、微細な点まで考えてある。

マンションの一室を、冴子はおもい描いた。白を基調にした、瀟洒な部屋のたたずまいとダブって、五堂利夫の顔が浮かんだ。

広い額。濃い眉。強い意思力を物語るかのように強い光をたたえた目。高い鼻。真一文字に固く結ばれた唇。

がっしりした肩幅の持ち主で、みるからに精悍そうな感じがある。男臭さにあふれているが、時折、双眸が、ふっと翳ることがある。

そのとき、五堂利夫の顔に、哀愁のようなものが漂うが、その感じも素敵だとおもう。

五堂とは、二年前に、駒沢のオリンピック公園にあるテニスクラブで知り合い、おたがいに愛し合うようになったのだけれども、結婚相手としては申し分のない男性だ。両親がいうように、わたしには、

「過ぎた相手」

だといえるかも、しれない。

「五堂さん……」

と、冴子は頭のなかの五堂利夫に呼びかけた。三日間ほど那須方面にドライブすることは、電話で伝えてあるけれども、いま霧のなかで立ち往生したことを知ったら、五堂は、すぐに飛んできてくれるだろうか。スーパー・マンのように夜空に赤いマントをひるがえしながら。

〈いま頃、五堂は、どうしているのだろうか〉

と、おもった。いま頃、アパートでひとりで寝ているだろうか。あるいは、仕事の打ち合わせで、銀座のバーでお酒でも飲んでいるだろうか。

頭のなかの五堂のイメージが、鮮明度を増した。いま、隣の助手席にいるような気がした。

〈どうしているの、いま〉

冴子は、五堂に語りかけた。

〈……〉

返事はなかった。

〈後二週間で、わたしはあなたのものになるわ〉

その瞬間、五堂の顔が、すうっと翳ったようにおもえた。

〈どうかしたの？〉

驚いて声をかけ、冴子は目を開いた。
運転席の扉の向こうに、男の顔がみえたのは、そのときだった。
一瞬、冴子は危うく、あっと叫び声をあげそうになった。
錯覚かとおもった。こんな深い霧のなかに、忽然と男が現れるわけがないではないか。
だが、錯覚ではなかった。
男は、車の外で、じっとこちらをみつめている。窓ごしに見返して、冴子は胸騒ぎを覚えた。人気のないところで、男に襲われたら、大変なことになる。
反射的に、冴子はエンジンをかけ、走り出そうとした。
男は、遠慮がちに運転席の窓を叩いた。
男は登山者の格好をしていた。登山帽をかぶり、リュックを背負っている。
登山帽からのぞく目は、ひどく優しそうだった。顔の輪郭も端正で、ギラギラした感じはない。
〈遭難者か〉
冴子は、とっさに、そうおもった。霧にまかれて道に迷ったのかもしれない。
最初の驚きがしずまるにつれて、そんな判断が生まれた。かといって、窓をあける気にはなれなかった。男はいつ豹変するかもしれない。
冴子は、車を発進させようとした。グッシュ・ボードの時計は十時四十分を指している。
〈車をとめてから二時間近く過ぎているのだわ〉
静かに車を走らせようとした瞬間、男の姿がぐらっと斜めに傾いて、そのまま崩れ落ちた。
〈なにが起こったのだ〉
冴子はこわごわ、窓の外をのぞいた。男は、地面に倒れて、物のように身動きしない。
〈死んだのだろうか〉
冴子は、車をそのまま走らせようとした。だが、駄目だった。男は疲労困憊しているのだろう。
このまま見捨て走り去れば、男は死ぬかもしれない。そんなおもいが、頭の隅をかすめ過ぎた。
やや逡巡したあと、冴子は車をとめた。
車を降りて、男に近づいた。
「大丈夫ですか……」
声をかけた。返事はなかった。男には、答えるだけの気力も体力もなかったのだろう。
散々、迷った末、男を車の後部座席に寝かせた。男を抱き起こし、引きずるようにして運びこんだのだ。
車内に用意してあった、ポットのコーヒーを男の唇に流しこんでやった。
「ありがとう」
男は、低い声で礼をいった。
あたりは、依然として霧が深い。町の病院を探しに走ろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com